

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ブルー・マンションの設立者チョン・ファツツイー

篠崎香織 (北九州市立大学外国語学部教授)



ブルー・マンション。チョンはペナン島では、アイルイタムのケックロックシー（極楽寺）の設立（1905年）にも資金提供者の1人として携わった（筆者提供、2009年9月撮影）

世界文化遺産の街ペナン島ジョージタウンのリース通りに、鮮やかな藍色が美しい豪邸ブルー・マンションがある。ホテルやレストラン、カフェ、バーを備え、一部を博物館として公開するペナンの観光名所の1つである。

ブルー・マンションは、チョン・ファツツイー（Cheong Fatt Tze / 張弼士、1841～1916年）の邸宅兼オフィスとして1897年に着工し、1904年に完成した。「東洋のロックフェラーと呼ばれた大富豪」と紹介されることの多いチョンは、東南アジアの華人のために中国のビジネス環境整備に奔走した人物でもある。

チョンは広東省梅州市大埔県に生まれた。18歳で今日のインドネシアのジャカルタに移り、1860年代にジャワ島西部やスマトラ島のメダン、アチェなどで財を成した。

1870年代後半にペナンにも拠点を置き、1890年代後半にはペラやスランゴールに事業を拡大した。マラッカ海峡の両岸で、スズの採掘、プランテーション経営、アヘンの専売、貿易、海運など幅広く事業を展開した。オランダとイギリスの植民地政府も、中国・清朝政府も、チョンに一目置いていた。

チョンは東南アジアで蓄積した富を資本に、1895年頃から中国でも事業を展開した。中国では鉄道敷設など大きな資本が必要な事業を手がけ、東南アジアの華人に中国での事業への参加を呼び掛けた。

しかし、東南アジアの華人は中国投資に非常に消極的だった。中国では1840年代頃から福建省と広東省で帰国者の富を狙う犯罪が増え、1890年代に至ってもその状況が解消されず、東南アジアの華人は中国を危険

な場所とみなし、中国の地方官の治安維持や紛争調停の能力に不信を抱いていたためである。

チョンは中国で西太后と光緒帝に謁見（えっけん）する機会を得ると、イギリス領マラヤ（現マレーシア）などの例を示しながら、治安維持や紛争調停の制度を改善するよう進言した。また、商業会議所の設立を通じて官民のセーフティーネットを確保しようとした。

中国では1903年に商業の振興をつかさどる省庁・商部が設立され、その傘のもとに中国の主要都市に商業会議所が設立され始めた。中国の商業会議所は商人で構成される民間の組織であったが、商部に直接陳情を行うことができ、清朝政府に働き掛ける重要な経路を提供した。

チョンは広東省で商業会議所の設立にかかわった。またシンガポールを訪れて、商業会議所を設立し帰国時の安全確保に活用するようシンガポールの華人に呼び掛けた。シンガポールの華人はチョンの提案を歓迎し、中国に逃亡した債務者の追及という独自の意義も盛り込み、商業会議所を設立し、清朝商部に登録した。

ペナンでは中国に先駆けて華人の商業会議所が設立されていた。チョンはペナンの華人商業会議所にも清朝の商部への登録を呼び掛けた。同会議所はチョンの提案を受け、シンガポールの例も参照しながら、清朝の商部に登録した。

シンガポールとペナンの華人商業会議所は、今日の中華総商会の前身となった。商業会議所を通じた中国での安全確保は東南アジアの華人から一定の評価を得た。この仕組みは、清朝が倒れ中華民国が成立した後も維持された。

東南アジア・東アジアを股にかけて事業を行ったチョンは、シンガポール、インドネシア、香港、中国にも拠点を設けた。その中でもペナンのブルー・マンションは、最も豪華で精巧な造りで、チョンにとって最もお気に入りの拠点であったといわれている。

< 筆者紹介 >

1972年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。在マレーシア日本国大使館専門調査員を経て現職。専門はマレーシアの地域研究で、華人社会と民族間関係を研究している。著書に『プラナカンの誕生：海峡植民地ペナンの華人と政治参加』（九州大学出版会、2017年）。